

「研修雑感」

沖縄県立中部病院 腎臓内科 上原元太 (21期生)

兎に角救急の力をつけたくて、飛び込んだのが県立中部病院。これまで積み重ねてきた自信が如何に儂く脆いものであったかを実感する日々を過ごすこととなる。問診も身体所見もままならず、採血に至っては見事な大出血を披露してみせた。当時救急室には非常に優秀だが恐ろしい指導医がおり、心臓マッサージに参加しようと駆け寄った際、「邪魔だ!」と投げ飛ばされた記憶が鮮烈だ。救急室に憧れていた筈なのに、救急当直が一番忌み嫌うものになった。元祖草食系の小生は当直二日前からは眠りが浅くなり、当直終了後に熟眠を得るというサイクルを繰り返した。飛行機の飛ばし方もわからないのに早く飛べと尻を叩かれるストレス。「わからない」ということがこんなに辛いとは受験の時にも感じたことはない。そして、医師なら誰でもそうだろう、大きなPitfallを経験するのである。それは突然やってくる。刹那、頭が真っ白になり、本当に両足から力が抜けてゆくのである。意気揚々と医学部の門をくぐったあの日、命に携わるという覚悟が、これ程残酷なものであるとは誰も予想できまい。精神はこれ以上なく尽き果て、とことん打ちのめされるのだ。それでも他の患者さんには「Professionalism」を守ることを要求される。笑顔を作り、病棟へ足を運ばねばならぬ。考えれば考えるほど、懊悩のスパイラルへ巻き込まれていく。そこでどうするか? 若い医師は「Stop thinking, keep walking」という術を覚えるのである。流れに身を任せ、淡々と目の前のタスクをこなすことに全血を注ぐ。小生もそれで初期研修は乗り切ったものの、



今ひとつ心の霧が晴れなかった。やはり自分の頭でモノを考え、逆境に対峙し、ある程度割り切って乗り越えねば真の臨床家にはなれないのである。そう気付いたのは後期研修に入ってからであった(これを「大悟する」という)。以降、細かいところで創意工夫をするようになり、仕事にうまみが増した気がする。この4年間、「温室育ち」「軟弱世代」の小生がよくぞ耐えたと自らを讃えたい。助け合いの精神だけは腐るほど持っていた同期のお蔭である。墜落を繰り返した後、4年かけて何とか独りで飛べるようになった。操縦マニュアルには汚い字で臨床のPearls&Essentialsが書き込まれている。ご覧ください、今ではこんなに立派な医師になりました。といたいところだが、情けないことにまだまだ怠惰で自己保身に走る研修医から脱却できそうにない。憂える表情を作ればモテるだろうかと思いつきながら、今日も病棟をひた走る。結局、悟っても煩惱からは解脱できないというのが結論だ。